

ある女性アルコール依存症者の告白

アルコール ラヴァー

キャロライン・ナッブ
小西敦子 訳



アルコール・ ラヴァー

キャロライン・
小西敦子 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

早川書房

アルコール・ラヴァー
ある女性アルコール依存症者の告白

1997年6月20日 初版印刷

1997年6月30日 初版発行

*

著者 キャロライン・ナップ

訳者 小西敦子

発行者 早川浩

*

印刷所 株式会社享有堂印刷所

製本所 大口製本印刷株式会社

*

発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2-2

電話 03-3252-3111(大代表)

振替 00160-3-47799

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-208090-6 C0098

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

アルコール・ラヴァー

ある女性アルコール依存症者の告白

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

DRINKING
A Love Story

by

Caroline Knapp
Copyright © 1996 by
Caroline Knapp
All rights reserved.

Translated by
Atsuko Konishi

First published 1997 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan by
arrangement with

Dial Press

an imprint of Dell Publishing
a division of Bantam Doubleday
Dell Publishing Group, Inc., New York
through Japan Uni Agency, Inc., Tokyo.

カバー画 阿部真由美
装幀 ハヤカワ・デザイン

本文中に出てくる人物や一部の固有名詞は
プライバシー保護のため、仮名になっている。

両親のジーンとピーター・ナツプに愛をこめて
レベッカとモレッリに感謝をこめて

謝 辞

この本を世に出すにあたり、ドウ・クーヴァー・エージェンシーのコーリン・モイドと、ダイアルプレス編集者スーザン・カミルには多くの知恵と熱い援助を受け、言葉に尽くせないほど感謝している。

ダイアルプレスのキャサリン・ジェイズとスーザン・シュヴァルツには精神的にも実務上も支援を受けた。

親友のスーザン・バーミンガム、サンドラ・シー、ベス・ウルフェンズバーガー、ブルース・ハーヴェイ、モーリーン・デツェル、ジェーン・バンベリー、ビル・レーガン、メアリー・スタヴラカス、グリー・ガラード、ロビン・イスナー、そしてケアリ・バーバーには執筆中、終始助けられた。そして私の道案内人デヴィッド・ヘルツォークに感謝する。

目次

プロローグ 9

1 そう、これは愛のものがたり 11

2 二重生活 22

3 アルコール依存症は遺伝する？ 40

4 目の前のニンジン 68

5 アルコールの魔法 76

6 匿名性のセックス 91

7 液体の鎧と^{よろい}に^{インボスター・シンドローム}せもの症候群[”] 116

8 アルコール依存症とその症状 135

9 ドラッグ、過食症、拒食症、そして万引き 148

10 「否認」 165

	16	15	14	13	12	11
解説 斎藤 學	アルコールとの訣別	入院とA Aの呪文 ^{マントラ}	どん底 ²³⁴	二人の男性との交際	A Aのミーティングへ	依存症の自覚 ¹⁸⁶
309	282	265		213	209	

プロローグ

それは恋の終わりの始まりだった。

私は「恋」におち、そののち、愛が私の大切にしているものすべてを破壊していったので、その恋から抜け出さなければならなかった。

多事多難の恋だったが、あえてきっかけを一つあげるなら、旧友の子供、二人を私があやうく死なせかけた夜にその恋はこわれはじめた、と言えるだろう。

数年前、感謝祭の週末に私はともだちのジェニファアの家を訪れた。そしてディナーのあと、みんなで散歩に出た。ジェニファアとご主人、二人の娘と私。子供たちは五歳と九歳で、うつくしい青いひとみをもち、そばかすの笑顔がかわいい少女で、私は、母親のおてんばな友人という役どころだった。二人を追いまわし、宙に放り投げ、それから何を思ったか、二人を前とうしろに抱えて運ぼうとしたのだった。

まずエリザベスを背負い、下のジュリアを抱き上げて、私の首と腰に手脚をまきつかせた。百三十ポンドの子供を抱えて私はサンドイッチ状態になり、スポーツキャスターばりに叫び声をあげながら道路を走って渡りはじめた。

「カンガルーだっこよ！ やったわ！」

それからバランスをくずした。

前につんのめって頭からもろに倒れた。五歳のジュリアの小さな頭蓋を歩道にぶつけなかったのは奇跡だと、いまでも思っている。とにかく私は彼女を抱いたまま、なんとか右脚で支え、そして地面に倒れた。膝が小さな爆発をおこしたように感じたのをおぼえている。子供たちは無事だったが、私は救急病院に運ばれる羽目になった。膝の傷は重く、膝蓋骨まで見えたと看護婦さんから聞かされた。実際のところ、その夜、私はひどく酔っていて、子供たちを危険な目にあわせたのだった。

三カ月後、私は飲酒をやめ、長くゆっくりと深めていったアルコールとの熱烈な、もつれた、二十年にもおよぶ『恋愛関係』を断つことになった。

1 そう、これは愛のものがたり

私は飲んでいた。

リッツカールトン・ホテルでフュメブランを飲み、仕事場の向かいにあるうす汚れた中華料理店でジョニーウオーカー・ブラックのオンザロックをダブルで飲み、家でも飲んでいた。ずっと以前から高価な赤ワインを飲み、舌ざわりのよいメルローや芳醇なカベルネ・ソーヴィニヨンと、ソフトで素朴な味の南仏産ボーカステルの微妙な違いが判別できるようになった。だが、ニュアンスを気にしたことなど一度もない。実際、味などどうでもよかった。

断酒の直前のころ、自宅にコニャックを二本キープしていた。一本は見せボトルで、台所のカウンターにおき、本当のボトルは古いトースター脇の戸棚の奥に隠していた。見せボトルの中身はなかなか変化せず、週に一インチかそこらしか減らなかった。本当のボトルのほうは急激に減り、ときには数日でなくなつた。

一人暮らしにもかかわらず見せボトルをおいていた。要するに表面をつくらうことが大事だったのだ。

楽しいといつては飲み、心配事があるといつては飲み、退屈したり落ち込んだとき——ひんぱんに

あった——も飲んだ。父の死期が迫っていた年には実家のキャビネットにまで手を出した。父はケンブリッジ（ボストンとはチャールズリバーをはさんだ市）の家の裏側の寝室で、病院ベッドに横たわっていた。そして私は表側の客用バスルームにこっそり入り、トイレの背後に隠してあるオールドグランドのボトルを取り出したものだ。ひどい味だった——きつと十五年は経ったものにちがいない——が、脳腫瘍で父の死がじわじわと迫っていたから、まづくても飲み、氣ばらしの足しにした。

父の葬儀の日に母は空ボトルを見つけた。ほかのは処分していたが、それだけは忘れていたらしい。客用のバスルームを掃除中に母は、トイレのうしろに押しこんであつたボトルを見つけた。食堂のテーブルにいる私のところに、母はボトルを手にならみつけながら、そして深い失望を浮かべて入ってきた。そこで私は嘘をついた。

「それはずいぶん前のよ」

父が亡くなる半年前に、私と母とがかわした約束をもちだして、そう言った。

「一日に二杯」と私は約束していた。「それ以上は飲まない。だんだん減らしていくと約束するわ」前年の七月の日曜日だった。二日酔いによるひどい頭痛に苦しみながら私はそう言った。マーサズヴィニヤード島にあるサマーハウスに両親を訪ねたときで、前夜、深酒をし、ソファで母の隣にすわったまま酔いつぶれてしまった。もちろん、ひそかに飲んでいたせいだ。およそ三十分ごとに座をはずして自分の寝室に言つて、バッグにしのばせたスコッチをひっかけていた。夜もふけて、しゃべろうとするところれつが回らず、まぶたがふさがってきて開けているのに苦労した。

いつもはもっと慎重にふるまっていた。飲み過ぎないようにラインを設定して、みんなが寝室に引きあげたあと、夜の最後に思いきり飲むようにしていた。

だがその晩はルールを踏みはずし、母に見られてしまった。翌日、母は私を湖畔の散歩に誘った。

めったにないが、深刻な話をするときは二人きりになりたがった。七月中旬の、海風が強く、日差しも強い晴れわたった朝だった。私は畏怖をおぼえ、悔やむことしきりだった。母がひどく怒ってなければいいが、と願った。

家から、丘のふもとに青い水の弧をえがいているメネムシャポンドまで、私たちは小道をおりていった。しばらく無言で歩いたあと、母はこう切り出した。

「話があるの。あなたの酒癖が心配でね」

「わかってるわ」

と私は答え、足元の砂地に目を落としたまま、母の横を歩いた。もし目を上げたら、見たくない真実にあまりにも突然ぶつかるとはならないかと恐ろしかった。

「自分でも心配してるの」

私はそっと言い添えた。さっきの口調からして母は怒ってはず、ただ案じているのだと察せられた。そして母の言うとおりでと認めざるをえなかった。私も心配していた。少しだけ。

さらに歩いた。

「とても重大な問題よ。タバコより重大だわ」母は言った。

言葉にはとても慎重な人で、その「タバコより重大だわ」という何気ない言葉に込められた、多くの深い意味がしのばれた。喫煙はがんの原因で、父もがんで死にかかっていたし、母の身内も何人か死んでいた。それからほんの数年後、母自身も死ぬことになるのだが。

飲酒はさらに危険で、その理由も母は理解していた。喫煙は肉体を滅ぼし、飲酒は肉体と私の将来を破壊しうることを知っていた。肉体のがんが骨や血液や細胞を侵すのと同じように、アルコールは私の人生をなにもかも破壊しうるのだ。

「本当に重大なのよ」母はくりかえした。

私はうなだれたままだった。

「わかってる」

すくなくともそのとき嘘いつわりはなかった。社会的に適応しているアルコール依存症者として、アルコールは重大な問題で、液体の糊のように歯車をくるわせ動かなくさせてしまうのだと、一瞬だが頭が鮮明になって自覚するときもある。

その日、池はうつくしく、さざ波がたち、きらきらと輝いて、岸边にうち寄せられる砂をつかのま、深い茶色に変えた。私は三十三歳で、飲みすぎ、みじめで、その二つには何か関係があるはずだとわかってはいた。

母はとてもやさしい女性だった。

「なにか力になれることがある？ 私にできることはなんでもやるわ」と言ってくれた。そのとき私はあの約束をしたのだった。

母の目を見たくなくて、池を見やった。

「わからないわ。なんとかしなきゃとは思っただけ……」

匿名断酒会^Aについて調べてみるつもりだ、と告げた。

「さしあたり量を減らすわ。一日に二杯。それ以上は飲まない。約束するわ」

本気だった。その日の午後、私はフェリーでマーサズヴィニヤード島から、ウッズホール経由でボストンに帰った。まだ酒気が残り、頭痛と軽い吐き気をもよおしながらフェリー船上ですわっていた。ビールが飲みたかった。ほんの一本で気分がよくなるのに……。

一日ぐらい——たった一日ぐらい——アルコールなしで過ごせることを立証すべきではないのか、